

メッセージアウトライン 創世記33:1～16「兄エサウとの再会」

恨みをもって危害を加えてくるかもしれない兄エサウと再会する前に、ヤコブはペヌエルで神との格闘によって、ついに祝福を得ることができた。これは祈りのひとつの型である。格闘の中で彼のもの関節が打たれ、外されたということは肉的努力や自我が砕かれたことを象徴する出来事である。彼は肉の力ではなく、信仰によってこの戦いに勝利する必要があった。そしてついに彼はそれを得た。これも神の恵みであった。そして彼はイスラエル（神は戦う。神と戦う）という新しい名を与えられた。このようにして彼は平安と確信をもって兄エサウとの再会に臨むのである。

[1-2] 「ヤコブが目を上げて見ると、見よ。エサウがやって来た。四百人の者が一緒であった。そこで、ヤコブは子どもたちを、レアとラケルと二人の女奴隷の群れに分け、女奴隷とその子どもたちを先頭に、レアとその子どもたちをその後に、ラケルとヨセフを最後に置いた」

ヤコブは兄エサウが四百人の者を引き連れてやって来るということを先に送った使いから聞いて知っていたが、すでに神との格闘を通して平安と確信を得ていた彼は驚き恐れることなく近づいていく。

一族をこのようにグループ分けし、最後にラケルとヨセフを置いたのは彼の最も愛する家族であったからであろう。神との格闘によって人間的な努力による敗北、信仰による勝利を得た彼であったが、このようなグループ分けはいかにもヤコブらしい配慮である。とにかく、このようにして彼は家族全員を兄エサウと対面させるようにしたのである。

[3] 「ヤコブは自ら彼らの先に立って進んだ。彼は兄に近づくまで、七回地にひれ伏した」

ヤコブは一族の最後尾から先頭に出てくる。これは作戦というよりも彼自身の誠実さを示す姿である。七回も地にひれ伏したというのは最大級の礼のつくし方である。それでもヤコブがこの段階で兄弟らしい親密さを表していないのは、これまでの両者の関係から当然であろう。今、彼は本当に兄エサウに対して恐れと敬意の念をもって接している。これは彼が兄エサウの殺意を恐れてメソポタミアの母の親元に逃げた二十年前とは大きな違いである。彼は叔父ラバンのもとでの苦しい経験を通して神に取り扱われてきたのである。

[4] 「エサウは迎えに走って来て、彼を抱きしめ、首に抱きついて口づけし、二人は泣いた」

感動的な再会の場面である。先頭にいるヤコブのへりくだった態度にエサウの警戒心も解かれたのであろう。これまでの長い間の厚い壁が一挙に崩れて感動的な抱擁になったのである。

そしてエサウにこのような態度をもってヤコブと再会させたのも背後に神の働きがあったからであり、それこそヤコブがペヌエルで神と格闘し、祝福を与えられたゆえの結

果なのである。もしもヤコブが祈りにおいて神と格闘するようにして祝福と兄に会うための確信を求めなかったならば、どうなっていたであろう。私たちも人生の一大事において祈りなし、神の祝福なしに進んでいくなれば倒れてしまうのではないか。私たちもヤコブのように、そしてあの十字架を前にしたゲッセマネの園での主イエス・キリストのように熱心に祈り、恵みと祝福、確信を与えられ、道を開かれる者になりたい。

[5]「この人たちは、あなたの何なのか」

エサウも彼らがヤコブの家族であることはわかっていたであろう。それでこれはヤコブとの具体的な関係を尋ねたのであろう。ヤコブは、「神があなた様のしもべに恵んでくださった子どもたちです」と答えた。「あなた様」とはエサウ、「しもべ」とはヤコブ自身のことを言っている。ここでも彼がいかにかへりくだっているかわかる。これは演技ではない。

[6-7]「すると、女奴隷とその子どもたちが進み出て、ひれ伏した。次に、レアも、その子どもたちと進み出て、ひれ伏した。最後に、ヨセフとラケルが進み出て、ひれ伏した」

女奴隷とはビルハとジルパのこと。→30：4～13 ヤコブは一族をいっぺんにまとめてあいさつさせていない。これは2節の順番どおりであり、敬意と丁寧さが表されている。

[8] エサウは「私が出会ったあの一群すべては、いったい何のためのものか」と問う。この群れは贈り物として一群れずつ先に送られていたやぎや羊やらくだや牛やろばのこと。これらは合計五百五十頭以上あった。ヤコブは「あなた様のご好意を得るためのものです」と答えた。すでにその趣旨は先に家畜の群れを連れて行ったヤコブのしもべたちによって伝えられていたはずであるが、エサウはもう一度、それについて問い、ヤコブはエサウの好意を得るための贈り物ですと答えるのであった。

[9]「エサウは、『わたしには十分ある。弟よ、あなたのものは、あなたのものにしておきなさい』と言った」

この二十年の間にエサウもまた豊かに富む人になっていたのであろう。憎しみが解け、和解ができた今、このような贈り物はエサウにとって意味がなかったであろう。しかしヤコブはなおも熱心に勧める。

[10]「いいえ、もしお気に召すなら、どうか私の手から贈り物をお受け取りください。私は兄上のお顔を見て、神の御顔を見ているようです。兄上は私を喜んでくださいましたから」

これは決してお世辞のことばではない。ヤコブは予想に反して兄エサウが自分を快く受け入れてくれた暖かく愛に満ちた態度に神の御手の働きを見、エサウの顔を見ることが、ペヌエルで神の顔を見たことが二重写しのように感じたのであろう。

[11]「どうか兄上のために持参した、この祝いの品をお受け取りください。神が私を恵んでくださったので、私はすべてのものを持っていますから」

ヤコブの熱心さはエサウの寛大な態度を彼がどんなに喜んでいるかをどうしても知ってほしいという気持ちからである。これは彼が和解をはっきりとした形にすることを強

く願ったゆえでもあろう。ここでは贈り物の目的がなだめのためから、感謝のために変わっている。このことはヤコブの心の重荷がいかに大きかったかということを示している。それゆえ感謝も大きいのである。

「ヤコブがしきりに勧めたので、エサウは受け取った」これはヤコブとの和解への合意と見ることができるだろう。

[12] エサウはヤコブの一族の先頭に立って旅に同行しようと提案する。

[13-14] しかし、ヤコブはこの申し出を丁重に断った。その理由は、エサウへの不信がなおぬぐえないからではなく、エサウがヤコブ一族のペースに合わせるのは無理という考えからである。子どもたちや家畜の群れはすでにメソポタミアから長い旅路を歩んで来ている。十分休ませながら進ませないと危険を招くことになる。それゆえ、「あなた様は、しもべより先にお進みください。私は、前を行く家畜や子どもたちの歩みに合わせて、ゆっくり旅を続け、あなた様のもと、セイルへ参ります」(14)と彼は願うのである。さらに考えられるもう一つの理由は、彼の富と成功のすべてが神の恵みのゆえであるという強い自覚から、神のみにより頼んで生きていきたいという思いがあったからでもあろう。彼は神以外のものに依存することを願わなかったのである。

「あなた様のもと、セイルへ参ります」セイルとは死海の南東に広がる地。エドムとも呼ばれる。この後、実際にはエサウがセイルに向かって出発してしまうと、ヤコブの一行は反転して北へ向かい、もう一度ヤボク川を渡って「スコテ」(17)に移っている。さらに18節ではヨルダン川を渡って「シェケム」にまで行っている。ヤコブがセイルに行ったという記録はない。しかし、だからといってヤコブが再び意識的にエサウを欺いたとは考えにくい。後にエサウとヤコブは共に父イサクを葬っている(35:29)ので、ここでの別れが不愉快な印象を残しているとは思われない。それで、この時ではなく、いつかセイルのエサウの所へ訪れましょうとの意味で言ったのではないかと考えられる。また、ここには記録されていないエサウとの会話によって、結局すぐにはセイルに寄らないことに合意したとも思われる。しかし、これらすべての動きの中に神の摂理の御手が働いているのは確かであろう。

[15] エサウはヤコブの答えを聞いて同行者の中から何人かをヤコブのために置いていこうとするが、彼はこれも丁重に断る。

[16] 「エサウは、その日、セイルへ帰って行った」

兄エサウとの再会で緊張し、感動し、感激し、和解し、再び分かれて、長かった一日がついに終わった。これはヤコブにとって決して忘れられない一日となったことであらう。

この個所から教えられるように、私たちもヤコブのように神に祝福を与えられるまで熱心に祈り続け、求め続け、願い続け、そして祝福をいただくものになりたい。特に人間関係において平安がない場合、今日のヤコブとエサウの再会の個所からよく学んで、和解と赦しを得る必要がある。

傷つけた人には自分からへりくだって和解と赦しを求めていく。自分が傷つけられた人ならば神がイエス・キリストにあって私たちの罪を赦してくださっているように赦し、愛していく。→主の祈り(マタイ 6:9~15) 人を正しくさばくことができるのは、ただ神のみである。

私たちが人の悪を見てさばくことができたとしても、別の場所、別の時に今度は私たちが同じような悪を行うかもしれない。私たちは神の前に不完全で罪の暗闇の中にいるがゆえに神は聖く、汚れなく、罪のない、ひとり子イエス・キリストを私たちのためにこの世に送り、十字架につけて私たちが負うべき罪の罰の身代わりとされた。ここに神の愛がはっきりと示されている。→ヨハネ3：16

それゆえ、私たちも、この十字架にかかれ、私たちの罪をあがなわれたイエス・キリストを見上げつつ、お互いに愛しあい、赦しあって美しい兄弟愛を世に示し、そのようにして、この世に対して神の愛と赦しの素晴らしい福音を証しする者となっていきたい。

→詩篇 133：1～3